

# 都留文科大学の今よりこれから

## その一 まず社会学科を新設して

学長 上田 薫

私が来任する前、都留文科大では文学部のほかに教育学部をつくるという構想が、大きくクローズアップされていました。しかし私が来たころは、教員激減を見越した文部省がすでに教育学部の設置を認めず、この企図は放棄のやむなきに至りました。けれども現状維持ではもはやもちたえられません。そこで真剣な討議を重ねた結果登場したのが、社会学科新設の案でした。

もともと教育学部構想は久しい。望みにこたえるものですが、今日に至っては卒業生の進路の点で難題にぶつかります。社会学科は地域社会で福祉等の社会的活動をする人間の育成を主眼として考えられたものでしたが、それをもっと広げて展開できれば、一般社会のどこでも活躍できる有為な人物を育てることが可能になります。そうならば大学は、これまでになく大きな世界を相手にすることができそうです。そういう広い視野のもとで、これまでのわが大学の教育理念をそんぶんに生かしようという可能性をも、この新しい学科はもっているのです。

私がかかっています。これは社会学科のためだけでなく、現前しつつある戦国時代を乗り切るための不可欠の手だてと考えて、貴重な予算を投入しているものです。じつは社会学科の新設は、他大学では想像もできぬほど切りつめた経費で行われました。そのときの苦心がなんとも大きかっただけに、今年の志願者が予想をはるかに越えて多く、社会学科は成功という評価が一般に得られたことは、喜ばしいというより先に、正直ほっとさせられることでした。

しかし今後数年で、教員の需要はまた格段に低下します。社会学科が成功しても、対策はなお半ばです。私たちは大学の無事を願って、いま次の大きな改革を鋭意模索中です。こんどは十分金をかけなければ無理です。それにことを急がねば、かんじんの時に間に合わなくなってしまう。とにかく多くの大学での食うか食われるかの生き残り競争に巻きこまれるのは必至ですから、ここ何年かはまさに正念場というべきです。

この勝負に勝つ方策は、都留文科大が大学をめざす全国の若者にとって、「魅力ある存在」になるということにつきまします。むろん宣伝だけ上手で内容がともなわぬというのでは、たちまち化けの皮がはがれましよう。授業やカリキュラムはいくらでもありませんが、建物も生活環境も他に見劣りせぬものでなければ、吸引力の上で勝ち目がありません。ことに要といふべき教授陣が弱ければ、敗北は不可避です。よき教員を迎えようようにする、そして優秀な人材の流出をくいとめる、それが私のもっとも切実なる悩みであることを、正直に告白したいと思えます。教育と研究とが好条件でできなければ、すぐれた大学教授を得ることはできない——これはどうしようもないきびしい事実です。私はこの点で、とくに市民のかたがたの理解を得たいと思えます。

あらためて言うまでもないことですが、四年制の大学は大きな経費を要します。本学の質的レベルを考えれば、現在の予算で十分かどうかと思う人はあるまいと考えます。大学の費用が市費の中で占める割合はたしかに大きいのですが、同じレベルの他大学と比較すると、奇跡の運営と評する人がいるくらいやりくりし切りつめて、経費削減を励行しています。

私はいつも教員たちに不十分な条件をしいてきました。教員一人あたりの学生数が公立大学の中で飛び抜けて多いという事実一つでも、そのことはわかっていただけでしょう。もっともしくぐくといふべき多くの要望まで抑えに抑えてきたことに、私の心が痛まなかつたといえようそになります。うしなれば大学の存立にかかわるといふ思いが、私に強くあつたということ。大学問題に詳しくない人が外から眺めれば、楽観的なもの見方もするかもしれませんが、教育行政の専門家に意見を徴すれば、事態のむずかしさ、きびしさは明白です。

しかし今幸にして市民のかたがたの力強い理解が得られれば、この戦国を乗り切つて大学の発展を確保する可能性についても、十分望みが出てきましよう。

むろんそのための道はいばらに満ちているでしょうが、当然ながら私たちは虚心に力をふりしぼろうとしています。ただそれを鼓舞するためには、やはり



社会学科授業風景（地域調査）